

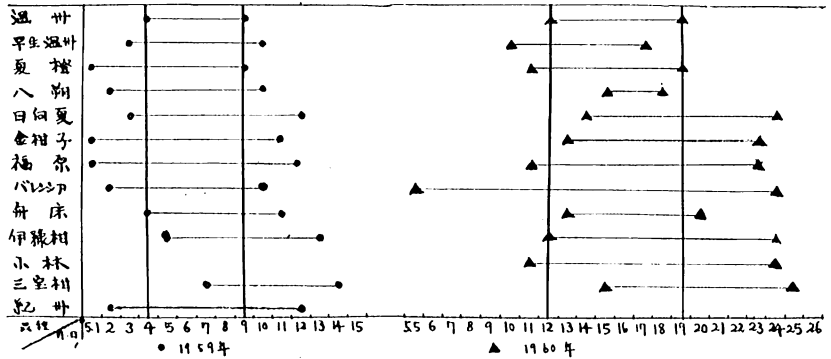
温州蜜柑の含核防止に関する研究 (予報)

中 村 昭 二*

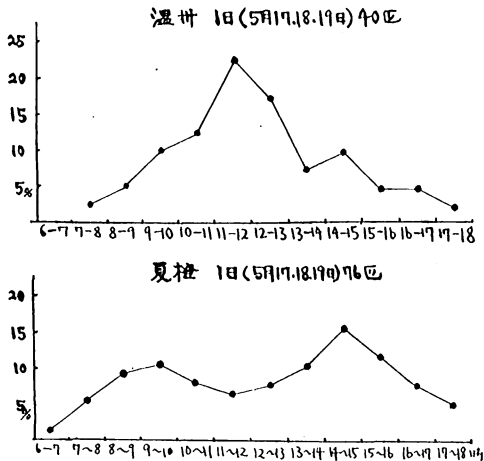
NAKAMURA, S. Studies on Prevention of Seeds for Unshu Oranges. (Preliminary Report)

温州蜜柑を加工原料に供給する割合は年毎に増大しているが、その品質、特に含核果実の混在しない上質な原料蜜柑であることが要求されて来ており、含核果の多い産地のものについては加工原料としての役割をはたさない場合も生じていて、有核蜜柑の混植している温州産地においては、含核防止の問題は極めて重要性を帯びて来ている。

第1図 柑橘主要栽培品種の開花時期



第2図 温州及び夏橙花の訪花昆虫の状態



* 大分県津久見柑橘試験場

そこで、1959年より含核防止の研究を実施しているが、初年度では含核に関する環境条件及びその実態の調査を行つたので、その成績の概要を報告する。

1. 柑橘主要栽培品種の開花時期について

平坦地圃場で同一管理をした各品種3樹を供用して、1959, 60年と2ヶ年その開花時期を調査した。開花期の判定は観察によつて行い、1割開花=始、6割開花=盛、9割開花=終とした。

栽培品種13種の開花期の状態は第1図の如くである。これによると、温州を始め各種共その開花期は殆んど同一時期で、特に栽培種の主体である温州、夏橙、八朔は全く開花期が同じで、品種間の交雑、温州の含核への影響が大であることが認められる。

2. 温州及び夏橙花の訪花昆虫について

同一条件にある平坦地圃場栽植の温州及び夏橙各1樹を供用して、1960年5月17, 18, 19日の3日間に亘つて訪花昆虫数及び種類を調査した。調査は観察により5~18時まで両種の樹の赤道面の4~5花有す

る1枝に来訪する昆虫を対象とした。

兩種の訪花昆虫の状態は第2図の如くで、1花房当りの訪虫は温州に比べて夏橙花に約2倍となつており、品種とか、有花粉花は訪虫数が多いことを示している。亦訪虫のピークは温州では正午前後、夏橙は10時と15時の2回となつていて品種による訪虫の選択性のあることが考えられる。訪虫の種類は大部分は蜜蜂で極くまれにハナアブ、ハナムグリその他昆虫の飛来が観察された。

3. 品種、栽植距離及び立地条件と温州の含核との関係

(1) 各品種及び距離と含核との関係

平地圃場で各品種に隣接して栽植している温州樹1本を選定し、3面から5果宛採果して含核を調査した。その結果、温州の含核と各品種とは何れも関係があるが、品種によつて可なりな変異が認められる。有核柑橘時との距離の関係は不明瞭であつた。

第1表 各品種及び距離と温州果実の含核との関係

品 種	果数	種子数	1果種子数	品 種	果数	種子数	1果種子数
小 宝	15	66	4.40	福 原	15	6	0.67
林 柑	12	40	3.30	バレンシア	14	10	0.67
力 夏	15	45	3.00	舟 床	14	7	0.50
向 夏	15	44	2.93	5 0 m	20	2	0.10
日 夏	15	38	2.60	1 0 0 m	21	11	0.93
八 朔	15	26	1.73	2 0 0 m	15	2	0.13
棧 柑	15	26	1.73	1 0 0 0 m	15	0	—
紀 州	15	16	1.10				

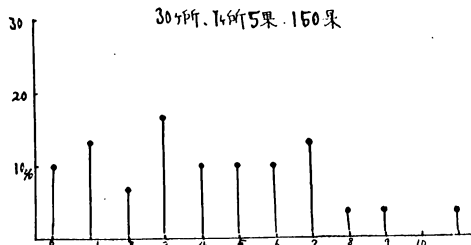
(註) 各3ヶ所, 1ヶ所5果。

(2) 夏橙隣接温州の含核状態

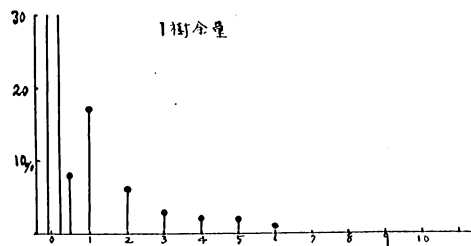
一般栽培園で夏橙の隣接したもの30ヶ所を選定し、1ヶ所5果、150果の含核状態は第3・4・5図の如くで、その9割の個所が1~10粒子の含核を示した。

同じ条件の1樹全果実の含核状態は32%, 1~6種子の含核数であつた。有核柑橘の殆んどない温州産地のものは含核果割合は17%であつた。

第3図 夏橙隣接温州果実の含核状態



第4図 夏橙隣接温州果実の含核状態



第5図 温州産地果実の含核状態

